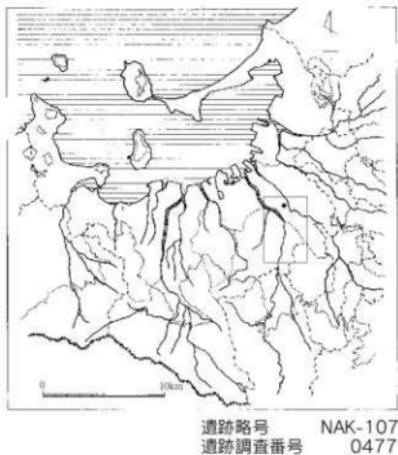


# 那珂44

福岡市埋蔵文化財調査報告書第890集

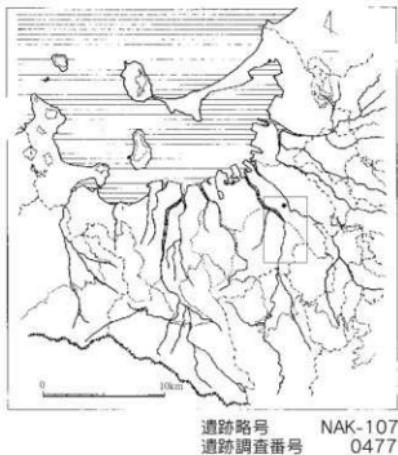


2006  
福岡市教育委員会



# 那珂44

福岡市埋蔵文化財調査報告書第890集



2006

福岡市教育委員会



# 序

福岡市には多くの文化財が分布しており、本市では文化財の保護、活用に努めております。しかし本市では各種の開発事業も多く、やむを得ず失われる文化財については記録保存のための発掘調査を行っています。

本書は共同住宅建設に先立って調査された那珂遺跡群第107次調査の報告であります。発掘調査の結果、弥生時代から古墳時代を中心とした遺構・遺物が見つかりました。比恵・那珂遺跡群は弥生時代から古墳時代にかけての大集落として著名でありますが、まだまだ性格不明の部分が多くあります。本調査は那珂遺跡群の縁辺部にあたる地点で、その成果は比恵・那珂遺跡群を総合的に研究する際に重要な意義をもっております。

本書が文化財に対する認識と理解を深めていく上で広く活用されますとともに、学術研究の分野での一助になれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から資料整理にいたるまでご理解とご協力をいただいた、前田双子様はじめとする関係各位に対し、心から感謝の意を表する次第です。

平成18年3月31日

福岡市教育委員会  
教育長 植木 とみ子

## 例 言

1. 本書は共同住宅建設に先立って、福岡市教育委員会が、2005年1月17日～2月9日にかけて行った那珂遺跡群第107次調査の発掘調査報告書である。
2. 検出した遺構については、調査時に遺構を示す記号Sを付して検出順にS-01,S-02,のように通し番号をつけた。本文ではこの番号に遺構の性格を示すアルファベットをSのあとに付しSC-1のように記述する。なお本文の遺構の記述は通し番号順ではなく、まず溝(SD)・土坑(SK)・性格不明遺構(SX)と遺構の種別毎に分け、その中で通し番号順に記述することとする。
3. 本書で使用する方位は磁北である。
4. 本書で使用した遺構実測図は福岡市教育委員会埋蔵文化財課 赤坂亨が作成・製図した。
5. 本書で使用した遺物実測図は赤坂が作成・製図した。
6. 本書で使用した写真は、赤坂が撮影した。
7. 本書の執筆・編集は赤坂が行った。
8. 弥生土器・甕棺の時期比定には以下の文献を参照した。  
柳田康雄1987「高三瀧式と西新町式土器」「弥生文化の研究4 弥生土器II」(雄山閣出版)  
橋口達也1979「甕棺の編年的研究」「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」XXXI  
中巻(福岡県教育委員会)
9. 第1表において残存率の>10%は10%以下、計測値の（ ）は図上復元による推定値を示す。
10. 報告書抄録は裏表紙に記載した。
11. 本報告の記録類、出土遺物は収蔵整理の後、福岡市埋蔵文化財センターで保管されるので活用されたい。

遺跡調査番号	0477		遺跡略号	NAK-107	
地 番	福岡市博多区東光寺町1丁目11の一部		分布地図番号	No.37東光寺	
開発面積	307.146m <sup>2</sup>	調査対象面積	175.40m <sup>2</sup>	調査面積	158.97m <sup>2</sup>

## 本文目次

I.はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査体制	1
II. 那珂遺跡群の地理的環境と歴史的展開	4
III. 調査の記録	
1. 概要	5
2. 層序	6
3. 遺構・遺物	7
IV. 小結	14

## 挿図目次

第1図 那珂遺跡群および周辺遺跡 (1/25,000)	2
第2図 那珂遺跡群第107次調査位置図 (1/1,000)	3
第3図 那珂遺跡群第107次調査遺構全体図 (1/100)	5
第4図 東壁土層図 (1/80)	6
第5図 SD-02・03・04・05実測図 (1/80) および出土遺物実測図 (1/3)	7
第6図 SD-06・07実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	8
第7図 SD-09・10実測図 (1/80) および出土遺物実測図 (1/3)	10
第8図 SK-01実測図 (1/40)	11
第9図 SK-11・12実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	11
第10図 SX-08実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/2・1/3)	12
第11図 遺構外出土遺物実測図 (1/3)	13

## 表目次

第1表 那珂遺跡群第107次調査出土遺物観察表	14
-------------------------	----

## 図版目次

PL1	1. 那珂遺跡群第107次調査a区全景	2. 那珂遺跡群第107次調査b区全景	
PL2	1. a区東壁土層	2. SD-02・03・04・05	3. SD-07
PL3	1. SD-06	2. SD-02・03・04・05南西隅部分	3. SD-09・10
PL4	1. SK-01	2. SK-12	3. SX-08
PL5	1. SX-08	2. a区遺構検出状況	
	3. 第107次調査地点から第102次調査地点を望む		

## I. はじめに

### 1. 調査にいたる経過

平成16年10月21日付けで前田双子氏より福岡市教育委員会埋蔵文化財課宛に福岡市博多区東光寺町1丁目11の一部の物件に関して、共同住宅建設に関わる埋蔵文化財事前審査申請書が提出された(事前審査番号16-2-700)。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群(分布地図番号37-0085・遺跡略号NAK)に含まれている地点であり、西側約50mの地点で行われた第29次調査では古代～中世の遺構・遺物が検出されていた。この申請を受け、埋蔵文化財課では申請者と協議の上、平成16年11月9日に申請地内の試掘調査を行い、現地表面から50～120cm下の鳥栖ローム層上面で弥生から古代と思われる溝状の遺構を確認した。この結果を受けて埋蔵文化財課では申請者に対して遺構が存在する旨の回答を行い、その取り扱いについて協議を行った。その結果、建物の構造上遺構の破壊は避けられないため、平成16年度に発掘調査、平成17年度に資料整理・報告書作成を行い、記録保存を図ることで協議が成立した。なお調査対象としたのは開発面積307.146m<sup>2</sup>のうち、6階建て共同建築物部分の175.40m<sup>2</sup>である。

調査期間は平成17年1月17日から2月9日までである(調査番号0477)。調査面積は158.97m<sup>2</sup>、遺物はコンテナ4箱分出土している。

現地での発掘調査にあたっては前田双子様をはじめとする関係の皆様から発掘調査について御理解いただきと共に、多大なご協力を賜りました。ここに記して深い感謝の意を表します。

### 2. 調査体制

事業主体 前田双子

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課

調査総括 埋蔵文化財課長 山口譲治

調査第2係長 池崎譲二

調査庶務 御手洗清(前任) 鈴木由喜(現任)

調査担当 調査第2係 赤坂亨

調査作業 水田ミヨ子 杉村百合子 酒井康恵 米倉國弘 草場恵子 辻美佐江

村井藤枝 大崎宏之 村山巳代子 西村登 西村寿美枝



1.那珂遺跡群 2.比恵遺跡群 3.那珂君休遺跡 4.板付遺跡 5.諸岡遺跡 6.五十川遺跡 7.井尻遺跡群 8.和田B遺跡  
9.野多日遺跡 10.野多日括渡遺跡 11.日佐遺跡 12.須玖・岡本遺跡 13.董居遺跡

第1図 那珂遺跡群および周辺遺跡 (1/25,000)



第2図 那珂遺跡群第107次調査区位置図 (1/1,000)

## II. 那珂遺跡群の地理的環境と歴史的展開

那珂遺跡群は那珂川と御笠川にはさまれた洪積台地上に立地する。本調査地は那珂遺跡群の北東端に位置し、台地の縁辺部にある。那珂遺跡群第107次調査地点の現況は宅地で、現地表面の標高は6.3mを測る。遺構検出面の鳥栖ローム層は南側5.9m、北側5.4mで確認された。現況では本調査地点周辺はほぼ水平に土地が整備されている<sup>i</sup>。北東80mにある比恵遺跡群第76次調査地点では現地表面6.9m、遺構検出面6.6mで0.5~1mの削平を受けたことが推測され<sup>j</sup>、北東方向130mにある比恵遺跡群第61次調査地点では現地表面6.8mで、遺構検出面が南側6.0m、北側5.2mで検出された<sup>k</sup>。また西方向60mにある那珂遺跡群第29次調査では現地表面の標高は6.6~7.0mを測り、遺構検出面の鳥栖ローム層は6m前後で確認されている<sup>l</sup>。これら周辺遺跡の調査結果と、本調査地点は北に向かって緩やかに傾斜し、削平の影響もほとんど見られないことから、本調査地点と第76次調査の間、那珂遺跡群第29次調査より東側の一街区に標高5m前後の浅い谷が入っているものと推測される。

また本調査地点は那珂遺跡群と比恵遺跡群との境界に近い場所に位置している。比恵遺跡と那珂遺跡は同一台地上の遺跡で、両者は比恵・那珂遺跡群といつ一つの遺跡群である。比恵・那珂遺跡群の弥生時代から古代までの歴史的展開についてはすでに詳細にまとめられている<sup>m</sup>。以下ではその成果を基に本調査地点周辺を中心にして比恵・那珂遺跡群の歴史的展開を簡単に見ていく。

比恵・那珂遺跡群は弥生時代中期末頃、古墳時代前期初頭頃、飛鳥時代前半の3時期に遺構分布のピークがあると考えられ、これらの時期の遺跡範囲は100haを超えるとみられる。本調査地点周辺で行われた調査における該期の検出遺構例を確認すると、比恵遺跡群第61次調査では弥生時代後期の井戸、古墳時代前期の井戸・溝が検出された。比恵遺跡群第67次調査では弥生時代中期の土坑・掘立柱建物、古墳時代前期の土坑、古墳時代中~後期の土坑・井戸・柱穴が検出された<sup>n</sup>。比恵遺跡群第76次調査では弥生時代中期の堅穴式住居、弥生時代後期末の堅穴式住居、弥生時代終末の堅穴式住居、古墳時代初頭の堅穴式住居、古墳時代後期の掘立柱建物が検出された。那珂遺跡群第29次調査では古墳時代前半期の掘立柱建物と古墳時代後半期の掘立柱建物が検出された。これらをまとめると堅穴式住居が多數検出された76次調査地点など比恵遺跡側が集落の中心であり、遺構のピークは弥生時代後期~古墳時代前期までと古墳時代後期の2時期で、弥生時代中期末・飛鳥時代のピークがみられない。本調査地点周辺は比恵・那珂遺跡群全体と比較して集落の継続期間が短い地域であったことが伺える。那珂遺跡群側の地域は弥生~古墳時代にかけての遺構は少ないが、那珂遺跡群第29次調査で古代の井戸・溝・柱穴、中世~近世の井戸・地下水横穴・土坑・溝が見つかること、古代以降はむしろこちらが集落の中心となり、逆に比恵遺跡側では遺構がみられなくなっている。これは本調査地点周辺に限定した変化ではなく、比恵・那珂遺跡群全体の傾向としても当てはまる。古代以降は集落が比恵遺跡群から那珂遺跡群にシフトしていくようであり<sup>p</sup>、中世後期には那珂遺跡群の段丘上に大溝がいくつも検出され、段丘上に城館のような有力者の屋敷がいくつも存在したようである<sup>q</sup>。

<sup>i</sup> 吉武学 2003 「76次調査の記録」「比恵32」福岡市教育委員会埋蔵文化財調査報告書第771集(福岡市教育委員会)pp3

<sup>j</sup> 長家伸 1998 「比61次調査」「比恵遺跡群26」福岡市教育委員会埋蔵文化財調査報告書第562集(福岡市教育委員会)pp66

<sup>k</sup> 山口謙治 1994 「那珂遺跡群第29次調査」「中南部(3)」福岡市教育委員会埋蔵文化財調査報告書第361集(福岡市教育委員会)pp5-6

<sup>l</sup> 久住謙雄 2002 「遺跡の立地と歴史の環境」「那珂32」福岡市教育委員会埋蔵文化財調査報告書第713集(福岡市教育委員会)

<sup>m</sup> 同iv文獻pp2

<sup>n</sup> 大庭樹 2003 「比恵31」福岡市教育委員会埋蔵文化財調査報告書第770集(福岡市教育委員会)

<sup>o</sup> 同iv文獻pp33

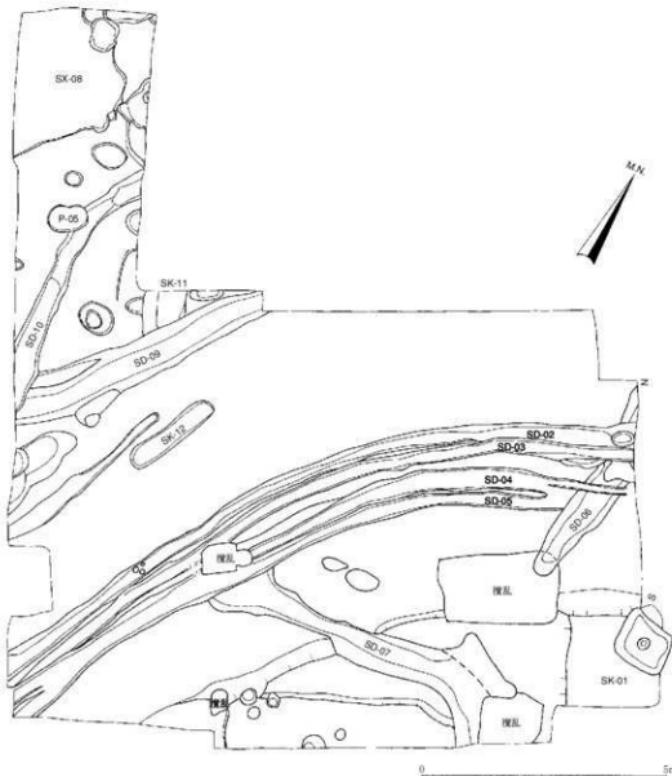
<sup>o</sup> 同iv文獻pp6

### III. 調査の記録

## 1. 概要

弥生後期～古墳時代前期の溝4、長梢円形土壙1、性格不明造構1、柱穴1、中近世の溝4、ピット6を検出した。遺物は弥生土器、甕棺片、土師器・須恵器（古墳～古代）、陶器片、黒曜石剥片が出土した。遺物の量は合計でコンテナ4箱分である。

調査は2005年1月17日のバックホウによる表土剥ぎより開始。調査区全体の形状は共同住宅の平面形状に合わせ、東西13m南北9mの長方形に、エレベーター部である南北5.5m東西2.5mの長方形が取り付いた形を呈する。北東に廃土場内処理のため調査区を東半(a区)と西半(b区)に分けて調査を行うこととし、まずa区より着手した。1月18日、機材搬入および作



第3図 那珂遺跡群第107次調査遺構全体図 (1/100)

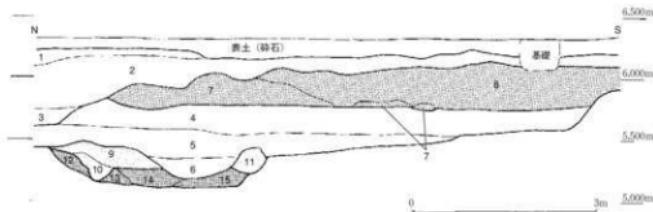
業員を入れ、外柵等の条件整備を行った後、a区の遺構検出を行った。1月19日、調査区北側の道路に直行するように任意に座標を設定し、調査区内の杭打ちを行った。1月24日、a区の遺構完掘。遺構の写真撮影、20分の1平面図の作成を行う。1月26日、高所作業車からのa区の全景撮影。1月27・28日、バックホウによる土砂反転を行う。1月31日、b区遺構検出を行う。2月4日、b区の遺構完掘。遺構の写真撮影、20分の1平面図の作成を行う。2月8日、高所作業車よりb区の全景撮影。2月9日、バックホウによる埋め戻し、および機材と遺物の引き上げを行い、調査を終了した。

## 2. 層序

層序は2区の東壁（第3図N-S）で確認した。地山は暗黄褐～暗赤褐色の粘性の強い土である鳥柄ローム層である。ローム層は東壁南側では標高5.900m、北側では5.400mで確認された。これは調査区の南東側が台地の縁にあたり、ここで段がついているためである。この段から北へ向かって緩やかに下っている。第4図の1～3層、4～6層が灰色粘土で水田の土で、6層はSD-02の埋土である。7層・8層が茶褐色粘質土で水田を埋めた土、9～11層が黒褐色粘質土のSD-06の埋土、12～15層がロームに黒褐色土の混ざった土で、SD-06の壁が崩落した土である。

まず始めにSD-06（9～15層）が埋没した後、SD-02が台地縁辺に沿って掘り込まれた。おそらくは水路として機能していたものと思われる。その後に4～6層が堆積し、段北側の低い部分が水田となった。台地の縁辺の段は人為的なものであり、ここが水田化した時にこの段を成形したのである。後述するか6層は中世以降の埋没であるから、水田化したのも中世以降である。その後水田である4層の上に7層・8層が人為的に盛られた。7層を堤とし、その内部を8層の土で埋めている。そして3層の部分を水田としていた。この時期は水田をやや狭めて台地を広くしていたようである。7層・8層の上に再び田土である1層・2層が堆積した。この時期は再び水田の領域が拡大したようである。その上に現表土が堆積し、現況の宅地となつた。

層序からみられるようにこの調査地点は台地の縁辺部で、おそらく中世以降は水田と台地上の居住域との境界部分にあたり、時代ごとの必要にあわせてこの場所を水田あるいは居住域として利用していたようである。



1. 暗灰青色粘土 2. 暗灰～灰青色粘土 3. 暗灰～灰青色粘土（2より青い） 4. 灰～灰青色粘土 5. 灰～灰褐色粘土 6. 灰～灰褐色粘土（5よりやや暗い） 7. 暗茶褐色～黒褐色粘質土とロームの混合 8. 茶褐色粘質土 9. 黑褐色粘質土 10. 黑褐～暗茶褐色粘質土 11. 黑褐～暗茶褐色粘質土（10よりやや淡い） 12. 褐～暗褐色粘質土 13. 暗褐色粘質土 14. 褐～明褐色粘質土 15. 褐～明褐色粘質土とロームの混合

第4図 東壁土層図（1/80）

### 3. 遺構・遺物

SD-02-03-04-05

#### 溝状遺構

SD-02・03・04・05(第5図)

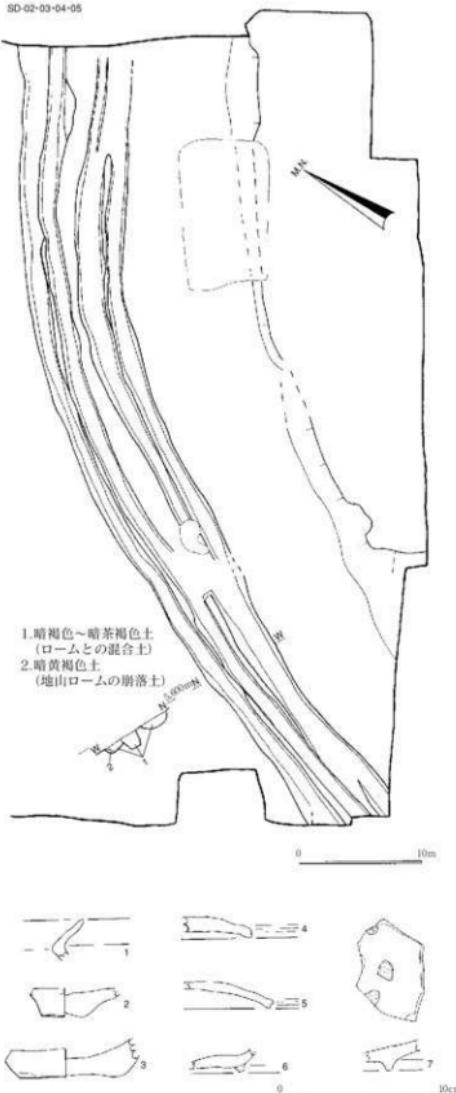
#### 遺構

調査区南側の台地の縁辺の段に並行して走る4条の溝である。北側からSD-02・SD-03・SD-04・SD-05である。一部底が丸くなっている部分もあるが、基本的に断面は長方形で、深さ10-20cm。東側でSD-06を中央付近でSD-07を切っている。埋土は第4図6層と同じもので段より北側が水田化したときに埋没したと推測される。

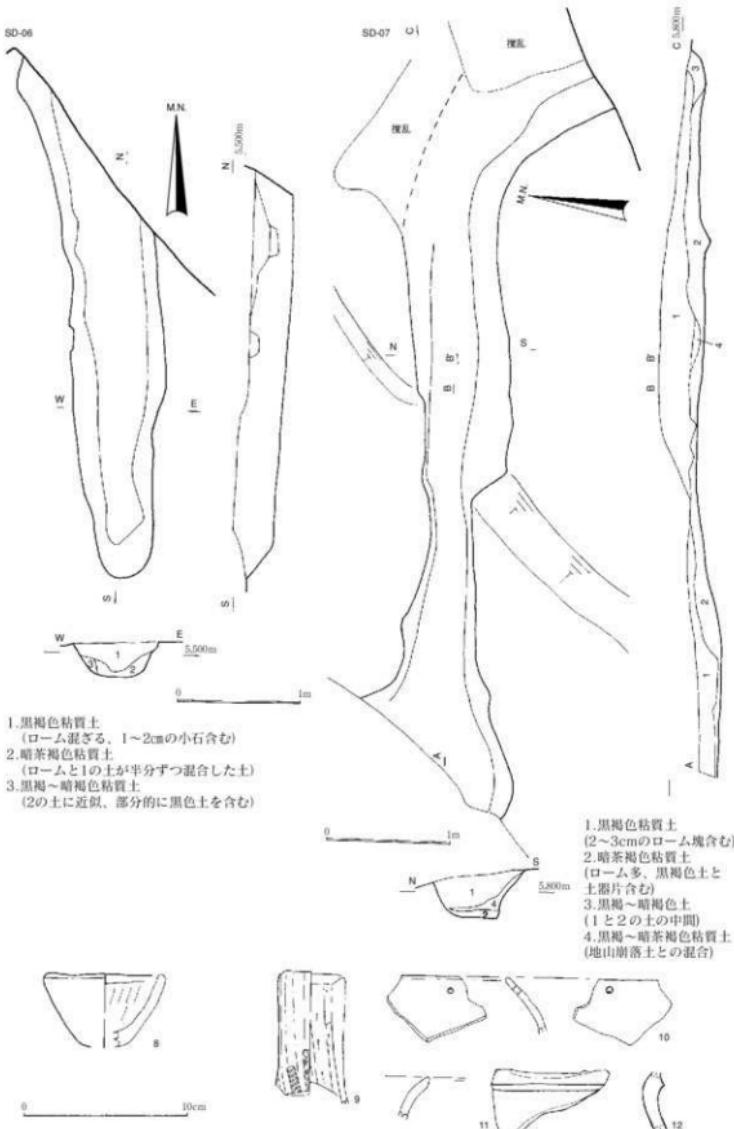
4条の溝の前後関係は、西側での土層観察の結果、SD-02→SD-03という順序であった。また調査区南西隅部分での切り合いよりSD-03→SD-04と確認された。ただしどの溝の埋土も同一であり、これら4条の溝にそれほど時間差はないと考えられる。溝底面のレベルは東側が約5.4m、西側が約5.3mである。

#### 遺物

1・6はSD-02、2・3はSD-03、4・5はSD-05、7はa区遺構検出面の溝付近から出土した。1は古墳時代前期の土師器口縁部片。内外面ともナデ調整。2は弥生後期壺底部片。外の底面に凹みがあり、内面に粘土紐巻き上げ成形の痕跡を残す。3は弥生土器の甕底部片。4・5は古墳時代須恵器杯蓋の口縁部片。どちらも外面に回転ヘラ削りを施す。6は古代須恵器杯身の底部片。7は中世～近世の陶器の底部片。碗もしくは皿で高台が付く。白色の長石釉で、釉全体に細かい貫入があり、見込み部に3ヵ所のトチン目が残る。1～6は混入。7は遺構外出土遺物であるが、これが遺構の時期を示すと考える。



第5図 SD-02・03・04・05実測図 (1/80)  
および出土遺物実測図 (1/3)



第6図 SD-06・07実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)

## SD-06(第6図)

### 遺構

調査区東半にあり、ほぼ南北方向に走る。北側は調査区外にのび全長および平面形状は不明。埋土は黒褐色の粘質土。溝断面形状は隅の丸い台形を呈し、幅70cm深さ30cm。SD-02~05に切られる。溝底面のレベルは北側約5.1m南側約5.2mであり、北側に向かって緩やかに傾斜している。

### 遺物

弥生時代後期～古墳時代前期の土器片が出土したが、図化できるものはほとんどなかつた。8は土器片を図上復元したものである。内面にヘラナデを施し、底面は指頭で押させて成形した痕跡が残る。小型の椀もしくはミニチュア土器と思われる。時期は弥生時代後期～古墳時代前期である。

## SD-07(第6図)

### 遺構

調査区南側中央に位置する。溝は段の手前で西方向に曲がり段の下に延びてSD-05によって切られている。コーナー付近は搅乱によって切られていて、コーナーの正確な角度は不明だが、直角よりやや鈍角気味に曲がり、調査区外へ延びていくものと考える。埋土は黒褐色の粘質土で、溝断面形状は隅の丸い台形を呈し、幅70cm深さ40cmである。溝底面のレベルは南側段上で5.8m、西側段下で5.4mを測る。段上から段下へ向かって緩やかに傾斜している。SD-06と似た埋土と断面形状であるが、両者の関係は不明。溝が直角に近い角度で曲がる点から、方形周溝墓の周溝であることも考えられるが、それを裏付ける遺物・遺構は検出されなかつた。土層観察の結果、台地の段はSD-07が埋没した遺構に成形されたことが確認された。

### 遺物

弥生時代後期～古墳時代前期の土器が出土した。完形の遺物はなく、いずれも小片である。9は弥生後期の高環脚部片。外面ハケ、内面縱方向ケズリを施す。10は甕の口縁部で口縁端部に径4mmの穴が開いている。補修孔か。11は甕口縁部片で外面ナデを施す。12は弥生後期の壺頸部片。頸部に断面台形の突帯を貼り付ける。本遺構の時期は弥生時代後期～古墳時代前期である。

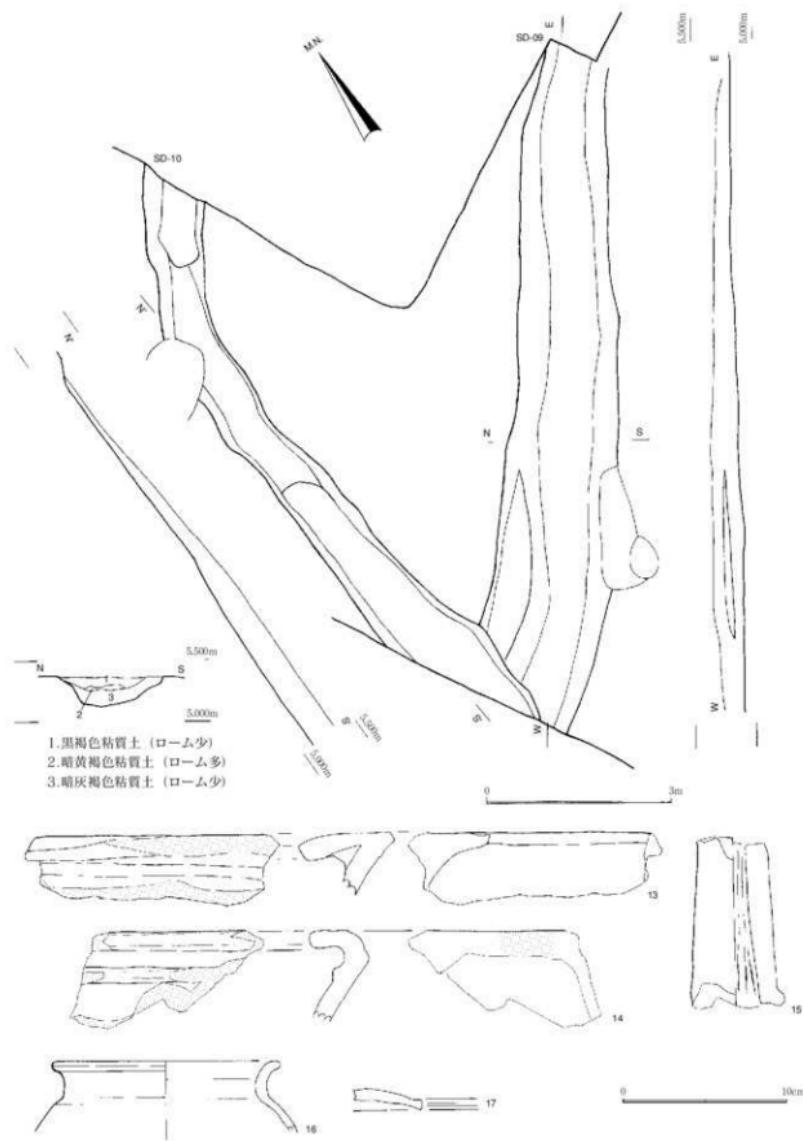
## SD-09(第7図)

### 遺構

調査区西半に位置し、北東から南西方向に走る溝である。北側と南側は調査区外に延びていて、南側をSD-10によって切られ、中央付近でSK-11を切っている。埋土は黒褐色の粘質土で、溝断面形状は底面の丸い台形を呈し、幅80cm深さ25cmを測る。溝底面のレベルは北東側が約5.2m、南西側が約5.1mである。南西側に向かって緩やかに傾斜している。

### 遺物

弥生時代中期後半～古墳時代前期の土器が出土した。完形の遺物はなく、いずれも小片である。13・14は甕棺口縁部片。北側の調査区壁面内より出土した。13は口縁部が平坦で胴部が口縁部ですぼまること、14は口縁下に凸帯をもつことと胴部が口縁部ですぼまることから両者とも橋口編年KIIIb期(弥生時代中期後半)に位置づけられる。15は弥生土器高環脚部片。SD-09の南西側から出土した。16は土師器甕口縁部片。SD-09の北西側から出土した。13・14はSK-11が中期まで遡らないことと溝状遺構で流れ込みが起こりやすいことから、13・14は混入であろう。本遺構の時期は弥生時代後期～古墳時代前期である。



第7図 SD-09・10実測図 (1/80) および出土遺物実測図 (1/3)

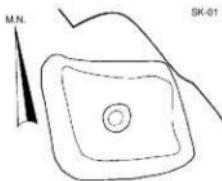
### SD-10(第7図)

#### 遺構

調査区西半に位置し、南北方向へ走る溝である。北側と南側は調査区外に延びている。南側でSD-09を切っている。埋土は黒褐色の粘質土であり、SD-09の埋土と類似している。溝断面形状は半円形を呈し、幅40cm深さ20cmである。溝底面のレベルは中央が約5.0m、北側が約5.2m、南側が約5.1mである。

#### 遺物

弥生時代～古墳時代の土器片が出土したが、図化できるものはほとんどなかった。17は古墳時代須恵器杯蓋口縁部片である。遺物によるSD-10の細かい時期の特定は難しい。

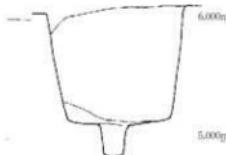


### 土坑

### SK-01(第8図)

#### 遺構

調査区南東端に位置する。南北80cm東西100cm深さ80cmの堀り方で、中央に径20cm深さ25cmのピットがある。埋土は黒褐色の粘質土であり、SD-06・07の埋土と類似している。大型建物の柱穴であろうか。



第8図 SK-01実測図 (1/40)

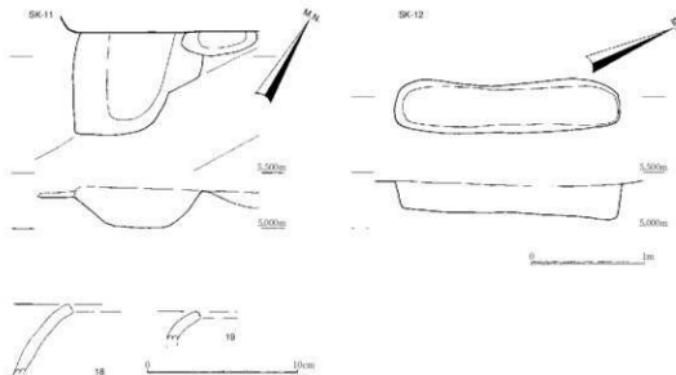
#### 遺物

弥生時代～古墳時代の土器小片が1点のみ出土したが、図化できなかった。

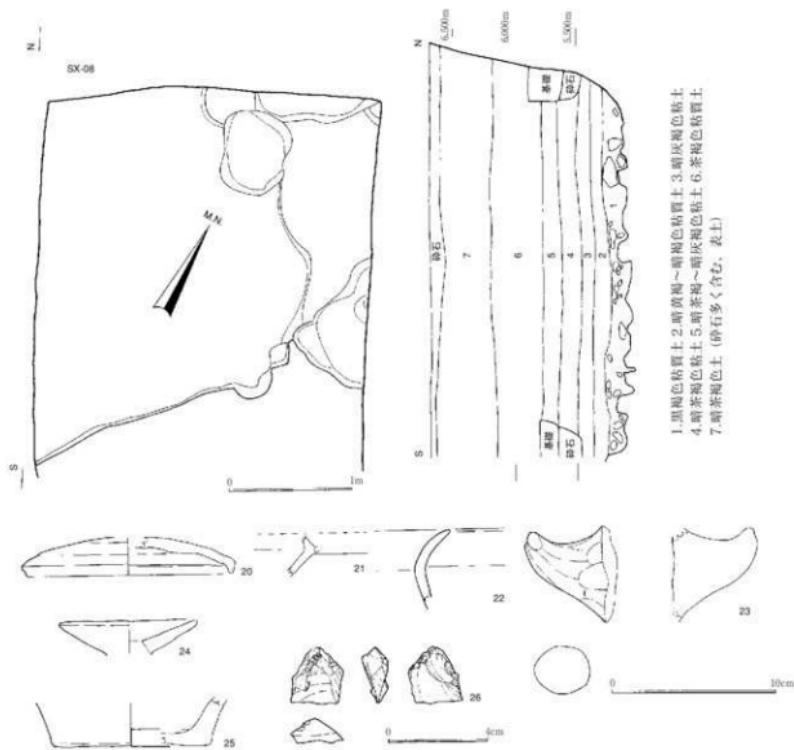
### SK-11(第9図)

#### 遺構

調査区西半に位置する。北西側は調査区外へ延び、南東側はSD-09に切られている。残存状況が悪く全容は不明。溝の可能性もある。埋土は黒褐色の粘質土で、溝断面形状は隅の丸い台形を呈し、幅120cm深さ40cmを測る。



第9図 SK-11・12実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)



第10図 SX-08実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/2 · 1/3)

#### 遺物

弥生時代後期～古墳時代前期の土器片が出土した。18は弥生土器(後期?)の甕口縁部片。19は弥生土器(後期)もしくは土師器の甕口縁部片。

#### SK-12(第9図)

##### 遺構

調査区西半に位置する、長楕円形の土坑。南北長200cm東西幅40cm深さ30cmを測る。埋土は黒褐色の粘質土で、断面形状は長方形を呈する。

##### 遺物

弥生時代～古墳時代の土器片が出土したが、図化できる遺物はなかった。

#### 性格不明遺構

#### SX-08(第10図)

##### 遺構

調査区北東端に位置する。深さ約20cmで、南側の立ち上がりは北東から南西方向に走る。北側の立ち上がりは不明。南側立ち上がり部分は鳥栖ロームであるが、底面は灰白色の粘土で

ある八女粘土層まで到達している。レベルは底面で約5.0m立ち上がり部分で5.3mを測る。鳥栖ローム層と八女粘土層との境界は5.1m付近である。埋土は黒褐色の粘質土で、多くの灰白色粘土塊（径5~20cm）を含んでいる（第10図1層）。2層は包含層で、3・4・5層が水田の土、6層が水田を埋め立てた土である。いずれの層も水平に堆積している。平面図では表しきれなかつたが、底面は凹凸が激しく、黒褐色粘質土が八女粘土層に細かく入り込み、黒褐色土を全て取り除くと八女粘土層に多数の穴が開いて、ゴツゴツした岩肌のような状態になった（PL-4・3、PL-5・1）。南側の地山から急に落ち込むため、上部は削平を受けている可能性がある。水が流れたような痕跡はない。一部、ピット状に深くなっているが明瞭に落ち込むというものではない。粘土塊を巻き込んでいる埋土の状態と、底面の凹凸は、粗く耕した跡に黒褐色土が堆積したようにも見えることから、水田跡の可能性も考えられるが確証は得られなかった。

#### 遺物

埋土を黒褐色粘質土の割合の高い上層と、灰白色粘土の割合の高い下層に分けて、遺構の掘り下げおよび遺物取り上げを行った。20~23が上層、24~26が下層である。20は古墳時代須恵器杯蓋片である。高径は図上復元し13.0cm。器高2.3cmを測る。外面に回転ヘラ削りを施す。21は古墳時代須恵器杯身の口縁部片。22は弥生後期の壺の口縁部片。23は古代土師器把手付壺の把手片。24は古式土師器の器台口縁部片。丁寧なナテを施す。25は弥生土器壺の底部片。26は黒曜石の剥片。縦2.3cm横2.2cm厚さ1.1cmを測る。上層は混入が多いようである。遺構の年代は下層の遺物に求められるが、細かい時期比定は難しく、弥生時代後期~古墳時代前期としておきたい。

#### ピット

全体にピットからの遺物出土量は少なく、図化できた遺物は1点のみであった。

#### P-05

調査区西半に位置する（第3図）。平面形は東西80cm南北50cmの梢円形を呈し、深さ3cmを測る。第11図29の1点が出土した。29は古代須恵器杯身底部片である。断面長方形の高台が付く。

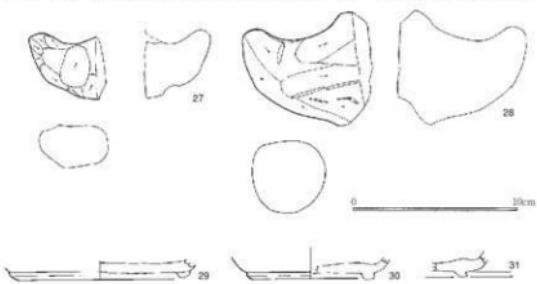
#### 遺構外出土遺物

調査区東半（a区）の東壁と、西半（b区）の北西隅のエレベーター部分の壁を上層観察のため法面を削った時に壁面包含層から數十点の土器片の出土がみられた。一括して取り上げたためいずれも層位不明である。

27はa区東壁下層より、28・30・31はb区壁拡張時に出土した。27・28は古代土師器把手付壺の把手片である。

30・31は古代須恵器杯身底部片である。断面長方形の高台が付く。

これら包含層の遺物は古代のものが多く、本調査区では該期の遺構は存在しなかつたが、調査区周辺には古代の遺構が存在する可能性がある。



第11図 遺構外出土遺物実測図（1/3）

## IV. 小結

本調査地点出土の最古の遺物はSD-09の弥生時代中期後半の甕棺片である。ただSD-09に切られるSK-11が中期まで遡らず、周囲の甕棺墓から破片が溝に流れ込んだ可能性がある。遺構が多くなるのは弥生時代後期から古墳時代前期である。この時期に黒褐色土を埋土とする溝や土坑などが作られた。SD-06・07は方形周溝墓の周溝の可能性もあるが現状では不明。SK-01も大型掘立柱建物の柱穴である可能があるがこれも現状では不明である。これらの遺構の性格の決定は本調査地点南側で調査が行われるまで保留したい。今回の調査で台地縁辺より下、標高5.4mでもこの時期の遺構が存在するという新知見を得た。SX-08は水田の可能性もある遺構だが、北側周辺の調査結果を待ちたい。古代の遺構は検出されなかつたが、包含層や遺構から該期の土師器・須恵器が出土しており、周辺で該期の遺構が存在することが推測される。那珂遺跡第102次調査で古代官道が検出されたこともその傍証となろう。その後中世～近世に、台地縁の下に水路が作られた。周囲でも那珂遺跡第29次調査で中世の遺構が見つかっており、那珂遺跡群では古代以降も集落が継続していたようである。近世以降は遺物・遺構ともなかつた。水田として用いられていたのであろう。ただし、常に水田だったわけではなく、何回かの水田域の変化があったことが土層観察から確認された。那珂遺跡群縁辺部における弥生時代から近現代までの土地利用の歴史的展開を押さえられたことも今回の重要な成果といえよう。

第1表 那珂遺跡群第107次調査出土遺物観察表

No.	遺構	大分類	小分類	部位	残存率	口径	器高	底径	焼成	胎土
1	SD-02	土師器	甕	口縁部	>10%				やや不良	やや粗い
2	SD-03	弥生土器	甕?	底部	>10%				普通	精良
3	SD-03	弥生土器	甕?	底部	>10%				不良	粗い
4	SD-05	須恵器	杯 蓋	口縁部	>10%				やや不良	細かい
5	SD-05	須恵器	杯 蓋	口縁部	>10%				やや不良	やや細かい
6	SD-02	須恵器	杯 身	底部	>10%				良好	細かい
7	a区遺構検出面	陶 器	瓶か皿	底部	>10%				良好	やや粗い
8	SD-06	土師器	ミニチュア?	口縁部	30%	(9.4)	4.5		やや不良	粗い
9	SD-07西半	弥生土器	高 环	脚 部	20%				良好	精良
10	SD-07東半	弥生土器	甕?	口縁部	>10%				やや不良	粗い
11	SD-07	土師器?	甕?	口縁部	>10%				やや不良	粗い
12	SD-07東半	弥生土器	甕?	脚 部	>10%				やや不良	粗い
13	SD-09西側	甕 柵		口縁部	>10%				やや不良	粗い
14	SD-09壁内	甕 柵		口縁部	>10%				やや不良	粗い
15	SD-09西側	弥生土器?	高 环	脚 部	20%				普通	やや粗い
16	SD-09東側	土師器	甕?	口縁部	>10%	(14.0)			普通	細かい
17	SD-10南側	須恵器	杯 蓋	口縁部	>10%				良好	細かい
18	SD-11	弥生土器	甕?	口縁部	>10%				普通	やや粗い
19	SD-11	土師器?	甕?	口縁部	>10%				やや不良	やや粗い
20	SX-08上層	須恵器	杯 蓋	口縁部	20%	(13.0)	(2.3)		良好	細かい
21	SX-08上層	須恵器	杯 身	口縁部	>10%				極めて良好	精良
22	SX-08上層	弥生土器?	甕?	口縁部	>10%				やや不良	粗い
23	SX-08上層	土師器	甕?	把手	>10%				普通	やや粗い
24	SX-08下層	土師器	小型容器	口縁部	>10%				普通	細かい
25	SX-08上層	弥生土器	甕?	底 部	>10%				普通	粗い
26	SX-08下層	黒曜石	剥 片		100%					
27	b1区東壁下層	土師器	甕?	把手	>10%				やや不良	粗い
28	b1区東壁張替	土師器	甕?	把手	>10%				やや不良	粗い
29	P-05	須恵器	杯 身	底部	>10%				普通	精良
30	b1区東壁張替	須恵器	杯 身	底部	>10%			(7.8)	良好	細かい
31	b1区東壁張替	須恵器	杯 身	底部	>10%				良好	細かい



# 図 版



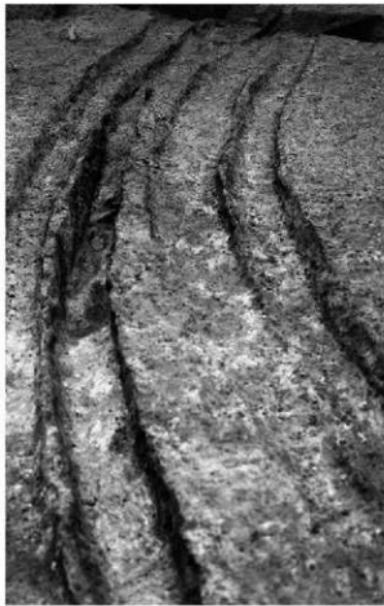
1. 那珂遺跡第107次調査 a区全景（北から）



2. 那珂遺跡第107次調査 b区全景（北から）



1. a区東壁土層（西から）



2. SD-02・03・04・05（西から）



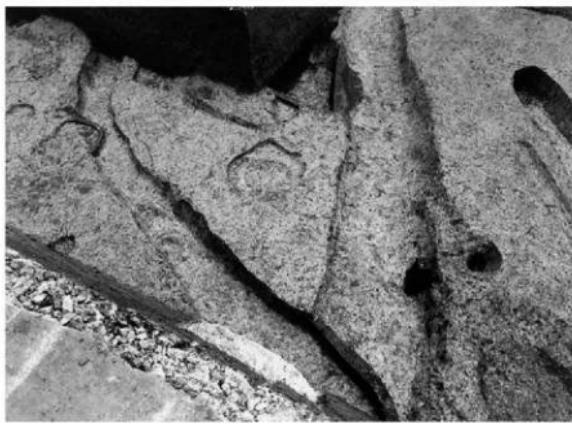
3. SD-07（東から）



1. SD-06 (東から)



2. SD-02・03・04・05  
南西隅部分(西から)



3. SD-09・10(南西から)



1. SK-01 (南から)



2. SK-12 (北東から)



3. SX-08 (北から)



1. SX-08 (東から)



2. a区遺構検出状況  
(西から)



3. 第107次調査地点から  
第102次調査地点を望む  
(南東方向)

## 報告書抄録

ふりがな	なか						
書名	那珂44						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	890						
編著者名	赤坂 亨						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1-8-1						
発行年月日	西暦2006年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°'"	°'"	m <sup>2</sup>	
那珂遺跡 第107次	福岡県福岡市博多区東光寺町1丁目11	40130	0477	33°34'37"	130°26'5"	20050117～ 20050209	158.97 共同住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構・主な遺物				特記事項
那珂遺跡 第107次	集落	弥生/古墳/中世～近世	集落・弥生後期～古墳前期・溝4+土壙2+柱穴1+性格不明遺構1-弥生土器+甕棺片+黒曜石剝片+土師器+須恵器/中世～近世・溝4-土師器+須恵器+陶器/時期不明- ピット6				
要約	弥生後期～古墳時代前期の溝4、長梢円形土壙1、性格不明遺構1、柱穴1、中近世の溝4、ピット6を検出した。弥生後期～古墳時代前期の方形周溝墓の周溝、大型掘立柱建物の柱穴、水田跡と推測される溝、大型土坑、性格不明遺構を検出したが、現状では性格不明である。また台地縁辺より下の標高5.4m前後でも該期の遺構が存在することが判明した。その後中世～近世に台地縁の下に水路が作られた。近世以降は遺物・遺構とも出土がなく、水田として用いられていたようである。						

## 那珂44

2006年(平成18年)3月31日

発行 福岡市教育委員会  
 福岡市中央区天神1-8-1  
 (092) 711-4667

印刷 有限会社 東京リスマチック  
 福岡市中央区赤坂1-15-27  
 赤坂ハイツビル2F  
 (092) 714-3121